

行動様式への気づき

— ライン歩き (2) —

加藤 敏弘

茨城大学教育実践研究

第22号 (2003) 抜刷

行動様式への気づき

—— ライン歩き(2) ——

加藤 敏 弘*

(2003年4月30日受理)

A Proposal for the Exercise for Awareness on Patterns of Behavior — Walking on a Line 2

Toshihiro Kato

キー・ワード：授業実践、挨拶、握手、行動様式、身体

学習者自身の行動が「身体」をとりまくさまざまな要因によって影響されていることに気づくためのエクササイズ（ワーク）として「ライン歩き（気づき編）」を紹介したが、ここでは、さらに挨拶という日常的な行為が歴史や文化の影響を受けていることや、そこに潜む身体的な特徴に気づくことを通して、学習者自身の行動が社会のさまざまな影響を受けていることを理解させるためのエクササイズ（ワーク）を、過去9年の授業実践を踏まえて方法を紹介し、その成果を学習記録をもとに検証する。

はじめに

本研究の目的は、「ライン歩き（挨拶編）」というエクササイズ（ワーク）によって、学習者の行動が歴史や文化の中で本人の意思とは無関係に規定されていることや、その行動の身体的な特徴に気づくことによって、社会に生きる学習者自身の不自由性を理解することができるかを検証することにある。

「ライン歩き（気づき編）」では、「無意識のうちに自分がとる行動パターンに気づく」ことができ、「自分の行動パターンを自分で感じながら、意識化を図る」ことにほぼ成功した。この「ライン歩き（気づき編）」は、ただラインの上を歩くというものであり、無意識のうちに任意の方向へ移動している自分の行動が、実は刻々と変化する周囲の状況やそれまでの自分の生い立ちに基づい

*茨城大学教育学部知識経営講座 (Laboratory of knowledge management, Faculty of Education, Ibaraki University, Mito, Japan).

たものであることに気づくものであったが、このエクササイズ（ワーク）に続いて、意図的に次々と人と出会うようにラインの上を歩き、出会ったら挨拶をするというエクササイズ（ワーク）が行なわれる。

「ライン歩き（挨拶編）」は、もともと実習系授業初期の段階で、クラスメンバーの名前と顔を一致させ、お互いの緊張をほぐすこと（アイスブレイク）を目的に実施していた²⁾。しかし、平成11年から始まった体に障害を抱えている学生や体に不安を感じている学生向けの授業「身体と動き」（健康・スポーツ科目）や「身体コミュニケーション」（教科又は教職に関する科目）では、単なるアイスブレイクという範疇を越え、コミュニケーションの基本となる「挨拶」に対する理解を深め、そこに潜む身体性を意識させるために行うようになった。こうしたエクササイズ（ワーク）は、「身体と動き」、「身体コミュニケーション」の他に、「身体論」（専門科目）という授業の中で行ってきたが、本研究では、平成14年度「身体と動き」における実践記録をもとに考察する。

1. 「ライン歩き（挨拶編）」実践

ここでは、「ライン歩き（挨拶編）」がどのように実践されるのかを解説する。このモデルとなった授業は、平成14年5月1日（水）1・2講時に茨城大学水戸キャンパスで行われた教養科目健康・スポーツ科目「身体と動き」で、この日の受講者は1講時24名・2講時15名である。

(1) 人と正面からぶつかるように歩きましょう！そして挨拶と自己紹介をしてください！

目的：挨拶の際、相手によってどのような違いがあるのかを感じる

指示：「フロア上に描かれたライン上を自由に歩き回りましたが、今度は、いろいろな人と正面からぶつかるように歩いてください。当然、ぶつかる前に止まって挨拶をします。そしてお互いに自己紹介をしてください。」

行動パターン：①知り合いと出会うように歩いて挨拶をする。

②知り合いと挨拶をしたら話し込む。

③同性と出会うように歩いて異性を避ける。

④できるだけ人と出会わないようにして挨拶をしない。

⑤知り合い以外と出会いそうになると気づかないフリをして避ける。

指示：「はい、やめてください」

解説：「人と真っ正面から向かい合うことは、普段の生活の中ではあまりありません。ですから、どうしても友だちや知り合いと出会うように歩いてしまいます。特に人見知りしてしまう人は、やっぱり人と出会わないように歩いてしまいます。また、男性同士、女性同士ならまだ挨拶できるけれども、異性と挨拶をするのは、みなさんどうも苦手なようです。このように人と挨拶をするということは、簡単なことのように、結構たいへんなことなのです。

挨拶というのはある程度形式的なところがありますが、実は型にはめることによってエネルギーをあまり使わないようにしてきたとも言えます。最近は挨拶がきちんとできないなどと言われますが、それは何となく形式ばった挨拶をけげらいする若者が多くなったからかも

しれません。それでも、今みなさんがやっていたように私たち日本人は必ずお辞儀をして挨拶をします。茶髪にしてカラーコンタクトを入れて外見上、西洋人のようにしてみても、挨拶の時には必ず頭を下げてしまいます。ロサンゼルスにいた時、アメリカ人にとってチャイニーズとジャパニーズは外見の区別がわからないと言うことでしたが、ジャパニーズはちょっと見ているとすぐにわかると言っていました。それは、すぐに頭を下げるからです。確かに電話で話をしていても、ハイ、と言いながら、頭を下げてしまいますよね。実は、挨拶の時にお辞儀をするというのは、世界的に見るとちょっと特異な習慣なんです。

それともう一つ、このまま進めばある人と挨拶することになるなぁと気づきながらも、その相手が知り合いじゃなかったら、気づかないフリをしてすっと曲がってしまったりしませんでしたか？その逆でこの人と挨拶しようと思って近づいても、すっとふられてしまうこともありましたよね。つまり、本当はその時点でお互いに気づきながらも、日本のお辞儀という挨拶の仕方は、ある一定の距離に近づかないと行われなわけです。」

(2) お辞儀をする時の距離はどれくらいでしょう！

目的：お辞儀の際の距離の違いで、どんな影響があるのかを感じとる

指示：「では、このお辞儀の時に私たちはどれくらいの距離を保つのでしょうか？ちょっと試してみたいと思います。」

実演：(学生の一人与向かい合って、4～5m離れたところでお辞儀をしながら)「この距離では普通お辞儀をしませんよね。(そう言いながら学生に近寄っていく。50cm以内に近づこうとすると、学生は自然に後ろに身を引いてしまう。)かと言ってこんなに近づいてお辞儀もしません。だとすると、お辞儀をするときはいったいどれくらいの距離なんでしょうか？(適当な距離を保ち、学生とお辞儀をしながら挨拶をする)たぶん、これくらいの距離ですよ。この距離が何センチなのか教科書に書いてありましたか？たぶん教科書には載っていないと思います。つまり、誰かが決めたわけでもないし、誰かに教わったわけでもないのに、全国各地から集まってきた人がはじめて挨拶をするのに、お互いにある一定の範囲の距離を保ちながらお辞儀をするわけです。おもしろいですよね。これが、靴の幅分、つまり30cmぐらい近づいたり、離れたりしただけで、何だか落ち着かない感じがします。」

指示：「それでは、いろんな人とどれくらいの距離でお辞儀をするのか確かめて、その距離から近づいたり遠ざかったりしてみてください。」

解説：「相手の背の高さや、男性なのか女性なのかや、知り合いなのか知り合いじゃないのかなどの要因で微妙に距離が違うかもしれませんが、だいたい90～100cm位です。その距離からプラスマイナス20cm位の範囲まで許容範囲ですが、それを越えて近づいたり遠ざかったりすると、ちょっと違和感を覚えると思います。このように人それぞれに相手との微妙な距離を保つのですが、これはお辞儀という挨拶の仕方に共通する距離感で、たとえば握手をする場合は、もっと近づかなければなりません。だいたい40～50cm位の距離でないと握手にならないと思います。試しにお辞儀をするときの距離で握手ができるかどうかやってみてください。おそらく微妙に手が届かない範囲だということがわかると思います。このようにお辞儀という日本独特の文化の影響を私たちは受けています。この距離は身体接触を許さない距離であ

り、こうした距離感が日本人に独特の身体感覚を植え付けていると言えます。」

(3) 握手をする

目的：世界のスタンダードともいえる挨拶の仕方を理解する

指示：「今度は、世界のスタンダードともいえる挨拶の仕方、握手をしてみましょう！」

行動パターン：①同性同士で握手をする

②握手をしながら、お辞儀をする

③左手で握手をする

④握手ができない

⑤ハイタッチなどスポーツ選手の間で行われている挨拶をする

解説：「日本人は、身体接触を伴う挨拶に慣れていないので、なんだかぎこちなくなってしまう。なかなか異性の手を握る機会はないでしょうから、ちょっとときどきしたりするかもしれません。それでも、何となくみんなが笑顔になっていることに気がつきませんか？それが、たとえ照れ笑いであったとしても、握手には笑顔がよく似合います。仮にムスッとした表情で握手をすると、どんな感じがするでしょうか？「握手はするけれども、本当はおまえのことが嫌いなんだ」と言わんばかりの敵対関係にあるような印象を持ちますよね。

どちらかという形式を重んじるお辞儀と比べると、実際に握手は相手とのその時々の人間関係に応じた使い分けがあります。手の握り方一つとってみてもずいぶん相手に与える印象が変わることに気づいたはず。逆に言えば、初対面の人に対して自分がどんな人間なのかを率直に表しているとも言えます。ですから、ビジネスや政治の世界では、この握手の仕方での後の交渉の内容にまで影響してしまうのです。

一般に日本人は握手という文化に慣れていないので、何となくいつも照れ笑いをして軽く手を握り、それと同時にペコペコお辞儀をしてしまいます。そのことがお辞儀という文化を持たない国の人から見ると、本当に奇異に感じるのです。ときどき左手で握手をする人などいますが、これなどは握手を挨拶の習慣にしている国の人からすると本当に失礼にあたります。留学生の話を聴くと、「日本人は握手の仕方を知らないからしょうがない」とあきらめているようですが、左手を差し出すことは相手を侮辱し、相手に挑戦することを意味しています。ボウイスカウトはわざと左手で特殊な握手をするようですが、特殊な例を除いてほしい握手は右手です。なぜ右手なのか諸説ありますが、握手が狩猟民族や遊



写真1 お辞儀をしながら握手

民を除いてほしい握手は右手です。なぜ右手なのか諸説ありますが、握手が狩猟民族や遊

牧民族の間で相手に対して、武器は持っていません、敵対意識はありません、というメッセージを伝えることから始まった3)ということを見ると、ナイフを持つ手が右手であることと何か関係があるように思えます。握る時の手の強さについては、それぞれの国の習慣によって多少異なるようですが、弱々しく握るのは、やはり相手に対して失礼にあたります。しっかりと相手を見て、笑顔で、相手と同じくらいの力で握り合うと失敗は少ないようです。」

(4) ハイタッチをする

目的：新しい感覚の挨拶によって、気づいた時に体で表現することを体験する

指示：「最近、プロ野球選手の影響でしょうか、ハイタッチなどをしている人もいますが、これなどもTPOがあります。スポーツ種目によっても、それぞれのチームによっても、微妙な違いがあって、その独特な握手の方法を共有することで仲間意識を強くしているようです。

こうした新しい感覚の挨拶に共通していることは、気づいた時にすぐにアクションを起こすということです。これは、日本のお辞儀とは決定的に違います。先ほどもお話したように、日本人は気づかないフリをして、挨拶をしないで済ませようとしてしまいます。もちろん、欧米諸国でも相手によってはわざと無視することもあるでしょうが、基本的に気づいた時点で手を挙げるとか、指をさす、顎をふる、目配せをするなどのアクションを起こすのです。それでは、またラインの上を歩きながら、お互いに気づいた時点で何らかのアクションを起こしながら、近づいて「ハイイ!!」と言いながら、ハイタッチをしてみましょう。」

行動パターン：①積極的に誰とでもハイタッチをする

②体をぶつけ合う、抱き合うなどの挨拶を始める

③積極的な人にアクションを起こされて、つられてハイタッチをする

④何となく抵抗感がありながらも、ハイタッチをしてしまう

⑤ハイタッチができない



写真2 ハイタッチ

解説：「ずいぶん、自分が積極的になれるなあという気がしませんか？ちょっと気おくれするような人でもこうして相手に声をかけられ笑顔で近づかれたら、思わず手を出してしまいますよね。こうした何気ない動作によって、その日一日の気分が変わることだってあるはずですよ。」

このように、日常の何気ない動作が私たちの心の在り方にまで影響していることを考えると、実は文化や社会習慣の影響を直接的に受けている体の動かし方が非常に重要であることに気づくと思います。その国や地域の文化や習慣の中で無意識のうちに身につけた体の動か

し方のことを「行動様式」と呼びます。例えば、アメリカで「こっちにおいで」というつもりで手のひらを下にして手招きしても、みんな離れていってしまいます。アメリカでは、手のひらが下に向いたまま手を前後に振ると「あっちへ行け」という意味になります。「こっちにおいで」という場合には、手のひらを上に向けて、人差し指を立てて、その指を手前に曲げるのです。こうした例は、枚挙にいとまがありません。どうか海外から来ている人の動作や日本人の動作を観察して、体を通して異文化を知り、体を通して国際人になってください。」



写真3 日本の「おいで、おいで」



写真4 アメリカの「Come on！」

2. 学習記録の分析

授業では、次のような実習記録カード5)の記入を義務づけている。平成14年5月1日(水)に行った2つのクラス(出席者計39名)で「ライン歩き(挨拶編)」に関する内容についての全ての記述を抽出し、場面毎に整理したところ、全部で104題となった。以下にその内容を示す。

(1) 自己紹介をしながら挨拶している時(36題)

●違和感があり、緊張し、照れ臭くて恥ずかしい(36.1%)

- 1) 少しぎこちない感じだった。
- 2) 少し緊張し、ドキドキする。
- 3) 誰と会うかわからず、ドキドキ。いろんな人の名前がごちゃごちゃになってしまった。
- 4) 相手と向かい合った時、相手との距離に関係なく気まずかった。
- 5) 案外照れ臭かった
- 6) けっこう照れくさい
- 7) 照れ臭い。やっぱり日本人だなと思った。周りの影響は知らずしらずに受けているなど、思った。
- 8) なんとなく照れてしまう

- 9) 人と面と向かうのは苦手
- 10) いろいろな人がいておもしろいけど、少し恥ずかしい。まだ、少し人を避けていた。
- 11) かなり恥ずかしい。自己紹介などに慣れていない。
- 12) けっこう恥ずかしいもんだし、なかなか人に会わない。
- 13) なんかも恥ずかしい。Sって私だけじゃないのか。

●どうしても避けてしまう (11.1%)

- 14) 避けた方が楽
- 15) いろんな人と挨拶できてよかった。・・・けど、やはり私は人を避けがちのようだ。
- 16) 何となく知っている人ばかり探して歩いてしまった。
- 17) 親しい友人となら自然にすることができるが、男の子とは何となく距離があるなぁと感じる。

●新鮮で楽しい (8.3%)

- 18) 少し苦手なことだけど、たくさんの人と挨拶して新鮮な気分になった。
- 19) 自然と笑顔になった。ぺこぺこしてた。
- 20) おじぎばかりしていた。あいさつは楽しい。

●お辞儀をしている自分に気づいた (16.7%)

- 21) 「どうもどうも～です」というふうに挨拶とお辞儀をしていた。先生の分析どおりだった自分が悲しかった。
- 22) お辞儀は本当に自然にしていた
- 23) どうしてもお辞儀してしまう。
- 24) どうしてもお辞儀してしまう。日本人の習性が自分にもあるんだなぁと実感。考える前に体が動いてしまっている。
- 25) 目が合うと必然的にお辞儀をしてから自己紹介をしていることに気づいた。
- 26) お辞儀をしてしまうというか、していれば安心というのがあった。

●日本人なんだなぁ (13.9%)

- 27) 極めて日本的
- 28) 少し間隔を開け、頭を下げての全員がしていた。まさに日本人そのものだったと思う。
- 29) 先生とSさんが本当に違う部族に見えた。
- 30) 日本人らしさはお辞儀に表れる。
- 31) やっぱり私は日本人です。それでいい。おもしろかった。

●自己紹介について (13.9%)

- 32) どちらが先に紹介するのか、と考えた
- 33) 自己紹介をしたけど顔と名前が一致しなかった。人の名前を覚えるのは苦手だと改めて思った。
- 34) なかなか人と会えない。難しい。一度にたくさんの方の名前は覚えられない。
- 35) 何人かの方の名前を覚えました。
- 36) 名前でお辞儀するようになる。相手が名字で返してくるとさみしい。

(2) お辞儀をする時の距離を確かめている時 (7題)

●同じ間隔 (42.8%)

- 37) 同じ間隔で挨拶していることに気づいた。
- 38) 微妙な距離だった
- 39) 無意識のうちに同じ間隔で人と接していることに気づいた。

●距離による感覚の違い (28.6%)

- 40) 人に対する位置によって感覚がここまで違うとは。
- 41) 威圧感って・・・

●パーソナルスペース (28.6%)

- 42) 挨拶の時の距離は対人認知とパーソナルスペースの違いでは？
- 43) 自分と相手との距離については、人間は他人に犯されたくない領域というのを持っていて、それをお互いに「何となく」感じながら近づいているんだと思った。

(3) 握手をしている時 (27題)

●意外に新鮮 (18.5%)

- 44) (お辞儀に比べて) 結構、フレンドリーにできた。
- 45) けっこうすんなりできた。
- 46) 意外と握手に抵抗はなかった。おじぎします。
- 47) これは結構おもしろかった。あまりやらない挨拶の方法だったので。
- 48) 外国式のあいさつはいつもとちょっと違った感じだった。

●お辞儀をしてしまう (29.6%)

- 49) 「おじぎ」で日本人であることを自覚した。握手しているのにどうしてもお辞儀をしてしまう。
- 50) 握手もするが、お辞儀もしてしまう。
- 51) 握手をして外国風にしてもやはりお辞儀をしてしまう。
- 52) 握手をしてもお辞儀している自分がいておもしろい。
- 53) 握手をしながらおじぎしてた (すごく日本人)
- 54) やっぱりおじぎをしてしまう。日本人!
- 55) 私はすごくお辞儀をする人なので、握手しながらず〜とお辞儀してた。
- 56) 「ハイ」と言って握手をしている途中に常にお辞儀が入るのが大発見で興味深かった。日本人に染まっているのがよくわかる。

●お辞儀の意味 (7.4%)

- 57) お辞儀しないと気持ち悪い。
- 58) 握手をしてもお辞儀をしてしまうのは癖とともに、自分は向かい合った人と視線を合わせる時間を短くするため。

●照れ臭い (11.1%)

- 59) とても照れ臭い。それでもおじぎをしてしまう自分は、やっぱり日本人だ。
- 60) とにかく照れ臭かった。文化によって違うことがわかった。

61) 慣れてないので照れ臭い。

●異性とはちょっと (7.4%)

62) 男性と握手をするのには抵抗があった。

63) 同性同士なら楽しく手を繋げたけど……。

●右手 (7.4%)

64) 握手は右手

65) 左手の握手はしてはいけない。喧嘩を売っているというのを知っていたから右手で握手した。

●手の感触 (7.4%)

66) 強く握る人より弱く握る人の方が多い。結構みんな笑顔ながらに日本風に近くなってしまった。

67) 人それぞれに手の温度が違った。

●文化の違い (11.1%)

68) 外国と日本がまざまざになっていておかしかった。違っているということを認め合うことが大事だと思った。

69) どうしても日本人は自分の文化からは離れないと感じました。(留学生)

70) 欧米の人などはボディタッチがあたりまえなのに、日本人はめったにしない。

(4) ハイタッチをしている時 (2題)

●知らないフリ (50%)

71) 日本人でも相手によって遠くからでも声をかけたり、近づきすぎてもイヤだと思わない相手もいるなあと思いつつも、だいたいは確かに近くに来て挨拶するし、面倒な時は知らないフリしてしまうなあと思った。

●テンションがわからない (50%)

72) 「ハイ」がなかなかテンションがわからず困った。自然にできるようになりたいな。でも日本では無理だろう。

(5) 全体の感想 (32題)

●楽しかった (3.1%)

73) 知ってる人とあらためて挨拶するのが、なんか楽しかった。

●自分について考えさせられた (9.4%)

74) 相手のことを受け入れることは簡単なことではないなあと感じた。

75) 知らない人と話すのはやっぱり大変かな。

76) ささいなことも自分は周囲に左右されることを改めて感じた。

●興味深い (15.6%)

77) 心と体がすごく不思議になった

78) 習慣・心って不思議。発見がいっぱい!!

79) すごく興味深いことばかりだった。ふだん気づかないことでおもしろい。

- 80) 先生の言ったこと一つひとつが「あ〜っ」と思うことばかり。
- 81) 文化人になった気がした。

●日本人について (18.8%)

- 82) 「日本人」について考えさせられた。
- 83) 気にしていなくても日本人なんだなぁと思った。
- 84) 日本人って変わってるかも!?さすが島国!
- 85) 日本人の習慣なんだなと感じた。自分もその中の一人である。
- 86) 日本人は自分の周りの非常にせまい範囲に人が入らないと挨拶をしたりしない。
- 87) 日本人って閉鎖的だ。

●文化の違い (21.9%)

- 88) 挨拶ひとつでも文化の違いがあると知り、軽いカルチャーショック。
- 89) 国によって文化が異なっていた。日本は日本で特異なものだ。
- 90) 文化の違いを目の前に出された感じだった。
- 91) 人はそれぞれ違うけど、普遍的な価値はあるみたい。本当だか?
- 92) 文化の違いを認めるのは大切だと改めて思った。
- 93) 日本人しか「おじぎ」という習慣をもっていないということをはじめて知った。しかし、それもまた独自の文化だと思うので、尊重してもいいんじゃないかなと感じた。
- 94) これからは国際化の時代なので「あいさつの仕方」というものを全国共通して作っていった方がいいと思った。

●行動様式について (15.6%)

- 95) 文化が自分の行動に表れることを知った。
- 96) 文化の違いによる行動の違いということに興味をもてた。
- 97) 「おじぎ」とか「相手との距離」とか、普段は気づかないことがわかってよかった。
- 98) 相手と話すときの間隔やあいさつの仕方など文化や自分たちが育った環境に基づいているということを知ることができてよかった。
- 99) 人の行動と文化の関連について体育で知ることができてよかったです。

●意識と行動 (15.6%)

- 100) 文化って無意識に自分の中に刻まれているのだと自覚しました。
- 101) 自分たちの行動が無意識によって支配されているのはおもしろい。
- 102) 普段の何気ない行動にはっとする点がいっぱいあったような。
- 103) 無意識のうちに周囲の人とか文化とかの範囲で行動していてびっくりした。
- 104) もっと自分がやっていると気がつかなければならないと感じました。

3. 記述内容についての考察

授業の初期の段階で行われるこのライン歩きでは、クラスのメンバーと初めて本格的に顔を合わせる。最初の人と正面からぶつかるように歩き、挨拶と自己紹介をするというワークでは、その記

述の47.2%が「違和感があり、緊張し、照れ臭く、恥ずかしく、人を避けてしまう」というものであった。その反面、挨拶をすること自体に「新鮮で楽しい」との記述が全体の8.3%あった。「お辞儀」が日本人に特異な挨拶の仕方であること⁶⁾を解説した影響もあり、「挨拶の時にお辞儀をしている自分の行動にあらためて気づいた、やはり日本人なんだなぁ」という記述が30.6%あった。

続いてお辞儀をしている時の2人の距離を測るワークでは、「なるほど、ほとんど同じ距離だ」と気づいた記述が42.8%で、その時の感覚の違いに気づいた記述が2題(28.6%)あった。他人に犯されたくないという領域(パーソナルスペース)があると考察した記述も2題あり、対人関係に関する洞察が深まっている。

握手という世界でスタンダードとも言える挨拶を行うワークでは、「照れ臭くて異性とはちょっとできない」という記述が18.5%であった。最初の挨拶と自己紹介の際の同様の記述が47.2%であったことを考えるとずいぶん緊張感がほぐれてきた様子が伺える。これは、「意外に新鮮ですんなり握手ができた」という記述が同数の18.5%であったことから読みとれる。ここでも解説の影響もあり、「どうしてもお辞儀をしてしまう、やっぱり私は日本人だ」という記述が29.6%あり、さらに「やはりお辞儀をしないと気持ちが悪いし、お辞儀をすることで相手との視線を合わせないようにしていることに気づいた」という記述も2題(7.4%)あった。手の感触や握手は右手でするものであることに気づいたという記述も14.8%あり、そうしたことから文化の違いについて考察した記述も3題(11.1%)あった。

さらに、新しい感覚の挨拶の仕方(ハイタッチ)を行った時にその距離感によって知らないフリをしてしまう自分の姿や「ハァィ」というかけ声の調子がわからずに、新しい感覚の挨拶ができるようになりたいけれども、日本ではちょっと無理だろうなぁという記述が見られた。

全体の感想としては、挨拶自体が楽しかった、あるいは、この挨拶を通して心や体のありようや習慣や文化について興味がわいたという記述が18.7%あり、あらためて挨拶の大変さを感じたという記述も3題(9.4%)あった。自分が日本人であることや文化の違いについて考えたという記述が40.7%にも及び、私たちの何気ない行動が実は歴史や文化の影響を受けていることが理解できてよかった、人間の行動は実は無意識に周囲の影響を受けていることをあらためて意識することができたという記述が31.2%あった。

おわりに

ライン歩き(気づき編)では、身体性に対する直接的な言及は見あたらず、行動を規定するさまざまな要因に思いを寄せることはできても、その感覚器官である身体と、身体そのものが行動の母体であり、そういう行動をする自分は身体性を抜きに存在しないという認識には、まだまだ至らなかった⁷⁾。しかし、本実践のライン歩き(挨拶編)では、身体が文化的な影響を受け、その行動が無意識のうちに身体感覚にも影響を及ぼしていることに、ほとんどの学生が気づくことができた。

本研究は、いわゆる一般体育の授業「健康・スポーツ科目」での実践を対象としたが、「99)人の行動と文化の関連について体育で知ることができてよかったです」という記述にあるように、大学の教養教育として、日常的な行動から総合的・学際的な興味や関心を促す意味で、意義のある実

践といえる。同時に「身体論」「身体コミュニケーション」での実践は、教員養成を主たる目的とする教育学部の学生にとって、「挨拶」という人間関係を構築する上でもっとも基本となる行為についての専門的な興味や関心を促し、そこに潜む身体性についての洞察を深める意味で、専門科目としても意義のある実践といえる。

知識・技能が高度化・専門化している今日において、学際的で総合的な知識を、学生に伝えるためには、常に新しいアイデアを練らなければならない。身体や行動に着眼しながら実技や実習を伴う形態の授業は、単なる知識の暗記に留まるものではない。自然科学において「実験」にウェイトを置いた授業展開が開発されているのと同様、人文・社会科学においても実体験を通して考える契機を学習者に与えることは、その後の自発的な学習を促すものと思われる。

今後の課題として、「ライン歩き」の体験が、学生のその後の学習活動や日常生活にどのような影響を与えているのかを追跡調査したい。

注

- 1) 加藤敏弘「行動する身体への気づきーライン歩きー」茨城大学教育実践研究, 21, 2002. pp.265-279.
- 2) 加藤敏弘, 前掲, p.268.
- 3) 今井登茂子・葛宗浩二「対話ネットワーク」トレーニングジャーナル, 11月号,1998.
- 4) 過去9年間の実践の中では、筆者が見逃した場面があるかもしれないが、このケースは見られなかった。つまり、この「ライン歩き」実践の中で当初の目的であった参加者同士のお互いの緊張をほぐすというアイスブレイクとしての役割は、ほぼ達成できていたと考えられる。
- 5) 加藤敏弘, 上掲, p.271.
- 6) 日本の他に韓国, 台湾, タイ, ベトナムなどでもお辞儀をするが、握手もする。仏教の影響から合掌してお辞儀も多く見られる。いずれも日本人ほどペコペコ何度も頭を下げることはない。
- 7) 加藤敏弘, 上掲, p.278.